

V 古 墳

1 ウワナベ古墳東外堤

A 遺 構 (PLAN18~21, PL. 2・25~31)

ウワナベ古墳東外堤の調査に際しては、後円部の北縁の東延長線から南方に60m間隔の地区割りをおこない、濠をふくめてK・L・M・N・O・Pの6地区に区分した(fig. 2)。第54次調査ではP・O地区に各1本のトレンチを設定し、第60次調査ではK~M地区に3個所のトレンチを設けた。ここでは、便宜上北方からP・O・M・L・Kトレンチとよび、各トレンチが2本以上になる場合には枝番号を付することにした。

Pトレンチ Pトレンチは、後円部のEN-WS方向直径のほぼ延長線にあたる。この付近は **外堤の現状** 南の畠地よりも約4m高く、南北10m、東西30~10mの小丘状の高まりを呈している。陪冢の可能性を考えて調査の対象にした。トレンチは長さ26m、幅6.5~8mで、外堤から濠に向けて設置したが、東限は国鉄関西本線のため調査できなかった。外堤と濠には古墳築造後に造成された厚い堆積土があり、それらは大きく4層に大別できる。

第1層 現在の外堤である。もっとも高い部分は海拔78m、現在の濠からの比高は約4.5mである。黄色砂質土を基調とする盛土で、土砂の汚れや粘土の混入状況に応じて数亜層に細分することが可能である。盛土は短時期になされており、なかでも西方の汀線に向ってのびる淡白色粘質土の堆積は厚い。

この外堤にともなう濠は現在もなお泥土の堆積を進行しており、上層の腐蝕土層と下層の赤褐色土斑入青白色粘土層とにわかれる。2層にわたってヨシの根が著しく張りこんでいる。

第2層 第1層よりも一回り規模が小さく、断面形がカマボコ形を呈する築堤。その西限は現状の汀線から約4.5m東に寄り、頂部での海拔76.5m、基底幅約6m、頂部の幅約2.5mの規模で、頂部には南北にのびる浅い溝があった。盛土に少量の奈良・平安時代の土器細片をふくみ、暗褐色土や茶褐色土に識別できる部分もあるが、亜層として細分することはできない。

濠は第1層外堤の下部に幅約6.5m、厚さ1~0.5mの堆積土をとどめる。西方は第1層濠の波濠によってえぐりとられている。堆積土は粘土と砂の互層で、4亜層にわかれており、少量の瓦器片を混入する部分もあった。

第3層 第2層外堤の前身にあたる築堤で、その規模はさらに小さい。頂部は海拔75.5m、幅4.5m、高さ0.7m前後。この築堤は一時の盛土ではなく、少なくとも3次にわたる盛土であり、頂部につくる南北方向の溝が次第に持上っている。築堤から一段低くなる東方の堆積層は上・下2層にわかれ、地山に接する下層には埴輪片を混えている。

濠の堆積は1.5~0.4mの厚さで、第1、2層の下部に広がっている。堆積土は、1：青灰色

粘土と灰黄褐色砂の互層，2：黄灰色粘土，3：灰白色粗砂からなり，少量の奈良・平安時代の土器片を混えている。

古墳築造時の外堤

第4層 古墳築造時の外堤。海拔74.7m付近で地山削り出しの外堤上面を検出した。外堤は幅9mにわたって平坦面をなし，黄褐色バラス土の地山からなる丘陵を削平したものようである。東方はトレンチ外にのびるが，西方は第2層築堤の西裾付近からえぐられ，内斜面の基底部分を濠中にのこしている。基底部分に拳大の河原石をふくが，約2m四方しか検出できなかった。残存葺石面は海拔71.2mあたりを下縁とし，海拔71.9m付近までのこり，約26.0°の傾斜角度を呈する。最下縁の基石は不明であったが，葺石は下部から上部に向かってふき，上下を通じて一列にならべる仕切り石も存在する。濠には厚さ0.6m前後に黒色粘土あるいは灰色バラス土が堆積し，そのなかに落下した葺石や埴輪片が混在する。

○トレンチ ○トレンチはPトレンチの土盛りの南端に接する島に設定した。現在，汀線に接して，高さ0.9m，幅約1.5mの畦畔があり，それを境にして東方では平坦面をなし西方では濠となる。トレンチは長さ24m，幅4mで，濠と堤にかけて設定した。

東方の平坦面では，最近まで耕作がなされ厚さ20cm前後の耕土下に，厚さ50cm前後の黄灰色砂質土の床土がある。床土の下，海拔74mあたりで黄褐色粘質土の地山面があらわれ，これが古墳築成時の外堤である。外堤内斜面は濠中にあり，最下縁は海拔69.9mとなる。その上部に，厚さ3mにわたる土砂が堆積する。堆積土は粘土あるいは砂質土からなり，数層にわかれ部分的に遺物をともなうが，堆積時期の識別はできなかった。内斜面の基底部付近には，葺石がのこる。葺石は幅0.8m，長さ1.6mの部分しか検出できなかった。傾斜角は24.0°。葺石はPトレンチの場合よりも少し小粒の河原石で，仕切り石や基石については不明である。また，Pトレンチの場合とおなじく，葺石面から濠底にかけて，落石と埴輪片をふくむ灰色バラス層が堆積する。

■トレンチ 前方部東方外堤上に，南北60m，高さ3m前後で北半が大きく南半の小さな土盛りがあり，一見前方後円墳の陪冢にみえた。トレンチは，北半と南半の各々に東西方向にいれ(M₁.M₃)，両者をつなぐ南北方向にも設定した(M₂.M₄)。

調査の結果，この土盛りは墳丘でなく，Pトレンチの場合と同じく黄褐色バラス土を基調とする後世の盛り土であることが判明した。たとえば，M₃トレンチでは，頂部から約3.5m下降した個所に褐灰色粘質土と暗灰色粘質土からなる2次にわたる耕土がある。耕土の下には褐色粘質土の床土があり，トレンチの西方では海拔73.5mあたりから青灰色粘土の地山となり，これが古墳にともなう外堤である。現在の汀線の東方約14.2m以東では，海拔74.3m付近で黄色バラス土の地山となり，保存がよい。このような状況は，M₃以外のトレンチでも確認できた。

■トレンチ 外堤の東南隅は，北側の島よりも約2.5m高く，南北約40m，東西約25mの台状地形を呈している。ここでも，陪冢をかんがえトレンチを設定した。トレンチは東西を横断するK₁，K₂，南北を縦断するK₃，K₄をまず設けた。台状の部分は近年まで茶畑として利用され，最上層に耕土がある。耕土以下の土層は，P・Mトレンチと同じく黄色粘質土や，黄色バラス土を基調とする後世の盛り土であり，墳丘ではなかった。盛り土の下部に旧水田面とかんがえられる黒色ないしは暗褐色の粘質土があり，その下に灰褐色の床土がある。床土の下，海拔74.1mあたりから黄褐色粘質土の地山となるが，これが古墳にともなう外堤である。

汀線の東方約30mをへだてたK₂，K₅トレンチにおいて，地山面を南北に布掘りし，埴輪を

据えつけた状況を検出した。外堤の周囲をとりまく埴輪列(SX740)である。K₃, K₄をふくむ埴輪列 SX740以西はいくぶん後世の攪乱を受けているとはいえ、おおむね平坦面をなし、現在の汀線以西は下降する。内斜面の葺石などの状況については、すでに水位が上がってきたため、調査を断念せざるをえなかった。発掘範囲内では、現在の畦畔の西方6.5mで内斜面の変換点があり、その傾斜角は約25°である。しかし、池水によってかなりえぐりとられていることは確かであり、必ずしも旧状を伝えるとはいえない。

SX740の東約1.5mを隔てて、地山は約20cm下がってSD732となる。溝幅は10m内外あり、東外濠岸でまた一段高くなっている。溝には上下2層の堆積があり、上層の暗褐色土には奈良時代の遺物をふくんでいることから、少なくとも奈良時代までは存続していることがわかる。東岸には小柱穴が1列、南北に走る(SA730)。奈良時代以降の小規模な溝である。

SD732の上層の堆積土から、南北に流れるSD734を掘りこんでいる。SD734は、SX740の東約2mを隔てて存在する幅70cm前後の素掘り溝である。堆積土は3層に区分され、その中層の暗灰色粘質土には炭化物や埴輪、奈良時代の土器片を混在しているので、奈良時代に開穿したの溝とかんがえられる。

SD732, SD734はSX740に平行しており、少なくとも、SD732は古墳築成時に設けられた外堤を圍繞する外濠というべきものである。

Lトレンチ Kトレンチで確認した埴輪列SX740を追跡するため、L地区において南北57m、東西6～11mのトレンチを設定した。

耕土と床土を除去すると、海拔74.8mあたりで黄色粘質土の地山面となり、Kトレンチで発見したSX470の北延長線上に埴輪片が散在する。それらは、埴輪の上部が崩壊したものであり、1個ずつのまとまりをもって散在し、若干の奈良時代土器片を混えていた。SX740は一直線に南北にのびる。埴輪列はKトレンチの場合よりも保存がよく、幅45cm、深さ30cm前後の掘形を掘り埴輪を樹立している。埴輪は鍔付円筒埴輪を主とし、発掘区南北長59mの間で114本を検出し、10mの間に22本の埴輪を配置していることになる。また、1個体分の蓋形埴輪も検出したが、それがどの位の間隔で配置されていたかは明らかでない。個々の埴輪によって多少の違いはあるが、最下段の第1凸帯を掘形の上縁に揃えて据える。また、埴輪の口縁部で揃えるためか、掘形の底に若干の土を埋戻した後に樹立するものもある。さらに、樹立に際しては円筒の内部にも土を詰め、固定に留意している。SD732とSD734が埴輪列の東側に平行する。このトレンチでは遺構の保存がよく、SD732は約60cmの深さをとどめる。しかし、SX740の西側は、耕作のためかなり削平されていた。

ウワナベ古墳外堤の復原 ウワナベ古墳東外堤の調査に関連し、南外堤のA点と西北外堤のB点において埴輪列の存在を確認した。その後、奈良県教育委員会は航空自衛隊の構内で、西北外堤を調査してその外周にめぐる埴輪列と外濠とを確認した(C点)*。他方、空中写真測量によって従来の墳丘測量図を補正した。このような資料を併用しながら、ウワナベ古墳の旧規を復原しようとするのであるが、不確定の要素も多く、この復原は絶対的ではない。

発掘調査などでえた外堤に関する資料は Tab.13 の通りである。5地点のうち、旧地表面にもっとも近い外堤上面は、Lトレンチである。このトレンチの南北長57mを隔てる間の比高で

* 1973年12月奈良県教育委員会は自衛隊構内で工事に伴う事前調査をおこなった。今回の報告

に際しては、奈良県教育委員会から発掘資料を提供され、種々の教示を受けた。

古墳築成以前の地形

	外堤上面 海 抜 高	外堤内斜面 下縁海拔高	内斜面 傾斜角
Pトレンチ	75.25 m	70.8 m	26.0°
Oトレンチ	74.20	69.9	24.0
Mトレンチ	73.50		
Kトレンチ	74.10		
Lトレンチ(北)	74.835		
Lトレンチ(南)	74.645		
A 点	73.20		
C 点	74.30		

Tab.13 ウツナベ古墳東外堤の海拔高

は、北方のほうが19cm高い。この傾斜を北方に延長すると、Pトレンチでの旧地表は海拔75.678m、Oトレンチでは海拔75.328mとなる。Kトレンチの海拔74.10mは旧地表に近いことから、北部から南部にかけてゆるやかに傾斜する外堤の状況がうかがえる。検出した外堤がすべて地山を削り出したものであるから、この傾斜は古墳築成以前の旧地形にもとづくのであろう。

外堤内斜面の葺石は、P・Oトレンチで確認した。最下縁に残存する葺石は、墳丘のそれに比して小粒であり、発掘範囲が狭いとはいえ、落石の量は少ない。Pトレンチの葺石は後円部の仮想中心から107m東北方に位置し、26.0°の傾斜角で葺石をふく。この葺石面を延長して外堤上面に接する上縁を求めると、下縁の東約9.7mにあたり、その比高は約4.9mとなる。Oトレンチの葺石最下縁は、後円部の仮想中心の東方約109mに位置し、24.0°の傾斜角で葺石をふく。この葺石面によって内斜面の上縁を求めると、下縁の東方約11.7mとなり、その比高は約5.4mである。外堤南端のKトレンチでは内斜面の葺石を検出していないので、外堤上面の勾配と下縁の勾配が比例すると仮定するならば、Kトレンチにおける下縁は海拔68m前後になる。この推定内斜面下縁を発掘で検出した外堤地山面の傾斜変換点にあわせると、東南隅での外堤上面幅は約30mとなり、その外方に10m幅の外濠がめぐることになる。

北西方の外堤

北西方の外堤B点では、6個の埴輪が現在の路肩に残存する。Pトレンチで推測した外堤の内周を後円部仮想中心から折りかえすとほぼ埴輪列の1.5m内寄りに相当し、これが外堤の内周をめぐる埴輪列であることがわかる。C点では、長さ約10mにわたって埴輪列を検出し、同時にその外方に外濠がめぐる外堤を確認している。B点との位置関係からして、その埴輪列が外周をめぐるものであることがわかる。そうしたことから、北西方での外堤上面幅は約24mであることがわかり、外堤の北部と南部では、幅員がことなることになる。

南外堤

南外堤のA点において、東西にならぶ2個の埴輪が存在する。それは、当初の位置を保っており、Kトレンチの埴輪列SX740を南に延長し、A点の埴輪と直角に結ぶ線が墳丘前方部の南縁とほぼ平行している。さらにその西延長線上に台形の水田があり、それを外堤の西南隅の痕跡とすることができる。このことからA点の埴輪を南堤の外周をめぐる埴輪の残存とみなすことにした。A点の埴輪位置に東南隅で推測した外堤上面幅を加えた点が外堤の内周となる。A点の埴輪の第1凸帯の高さ(海拔73.2m)を外堤上面の旧地表とするならば、東南隅の心からおおよそ100m西方のところで、約90cm低くなる。つまり、南外堤は西方に向って傾斜し、漸次低くなる。南外堤にともなう外濠の痕跡は、6AFB-J地区において検出していない。しかし、J地区の西北隅にあるSD444がSD734と連結するようであるから、一応この付近に外濠位置を想定することもできる。しかし、J地区の遺構検出面は、推定南外堤上面から約2m下っており、平城京造営に際して確実に破壊されていることになる。

さて、以上の推定にもとずき外堤全体の旧規を復原するとつぎのようになる。南外堤外周と北外堤外周との最大距離422m、南外堤上面最大距離305m。この外堤の周囲に10m前後の幅で外濠がめぐり、つぎに、外堤に樹立した埴輪の総数を算出しよう。Lトレンチにおいて長さ10m

の範囲に22本の埴輪を樹立することを基礎にすれば、内周は長さ1,129mで2,483.8本、外周は1,306mで2,873.2本、合計では5,357本を樹立する。

埴丘部分に対する写真測量での観察をのべよう。後円部と前方部が接するあたりの西側に「造出し」がある。この部分は貯水時には水面下に沈み、干水時に露出する。その上面は最高で海拔73.6m、南北長23m、東西幅12mの台形を呈する平坦面をなし周縁は濠に向かってゆるやかに傾斜する。南辺と北辺の埴丘に接する付近に埴輪列があり、その高さは海拔74m前後で造出しの上面とはほぼ一致する。後円部の汀線にも埴輪列が露出している部分があり、その高さは海

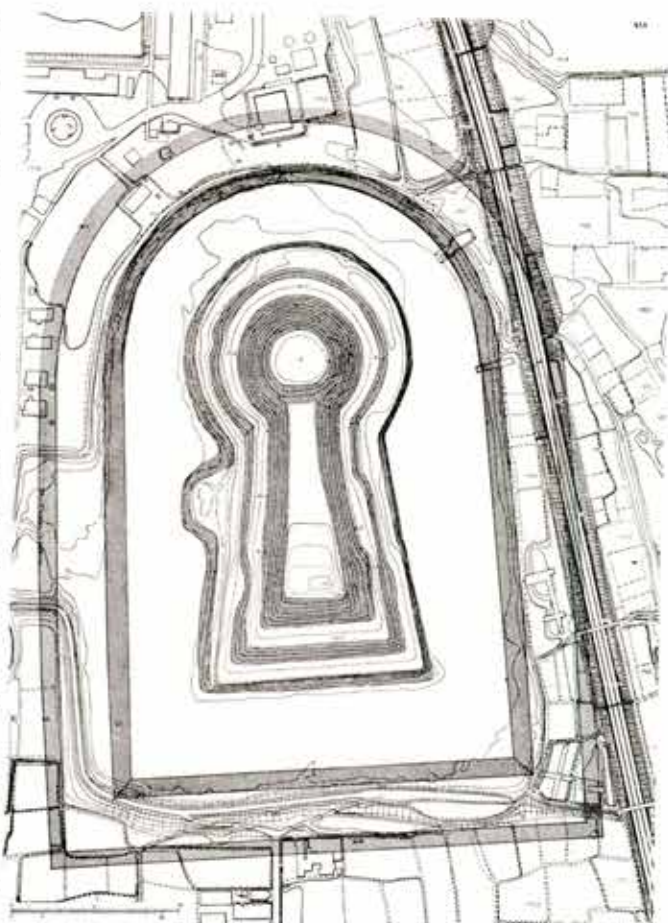


fig.20 ウツナベ古墳復原図

抜75m前後である。このようなことから3段築成埴丘の第1段の上面が海拔75~74mの間にあり、造出しの上面もそれに対応していることになる。さらに埴丘第1段の高さと外堤上面の高さをくらべると、わずかに外堤が高い状況になる。推測を加えるならば、古墳の東北方が高く西南が低い現象は丘陵の旧地形によるもので、前方部および外堤の西南部が盛土であろう。

外堤の変貌 発掘調査の結果、東外堤上に隆起する土盛りがいずれも後世の所産であることが判明した。土盛りがきわめて短期間におこなわれているので、明治29年(1896)に開通した奈良鉄道(現在の国鉄関西本線)の開工工事にとまなう残土であろう。

その後の
ウツナベ

Pトレンチで検出した第Ⅱ・Ⅲ層の築堤は、いずれも周濠の水位と直接に関係していない。江戸時代に描かれた法華寺領域図には、Pトレンチの北東部に新池と称する溜池が描かれており(fig.37)、この池の堤に属する可能性が大きい。第Ⅱ層築堤以後、外堤内斜面は著しく浸蝕を受け、ヘドロが厚く堆積していることから、定期的な水位の増減、つまり溜池としての利用がかんがえられる。外堤の東北方の山間部からの導入水路がとりついている関係から、とくにP地区で浸蝕と土砂の堆積が進行したのである。第Ⅱ層築堤に属する堆積土中に平安時代の土器が混入する。これは溜池利用の開始が平城京廃絶後にあり、古墳築成時にまで遡らないことを物語る。SD732は奈良時代に埋立てられ、そのかわりにSD734が外堤に平行する。SD734は6AFB-J地区にあるSD444と結び、道路の側溝にかんがえられ、南外濠は北京極大路に交じ東外堤の外濠は山城国と大和国を結ぶ道路に利用されたのであろう。他方、SD374の開穿および溝のなかの遺物は、奈良時代の陵墓祭祀と関係するかもしれない。

B 遺物 (PL.105・106)

ウワナベ古墳の東外堤の発掘を通じて検出した遺物には、外堤上に樹立した埴輪、8世紀に開穿されたSD734出土の土器類、さらに周辺の分布調査で採集した埴丘造出し付近の土器類などがある。

埴輪 埴輪列は鰭付円筒埴輪、円筒埴輪、蓋形埴輪からなる。^{*} しかし、朝顔形円筒埴輪に類するものはない。そのうち、鰭付円筒埴輪が大多数を占め、他はきわめて少数である。埴輪列はK・L地区で検出したが、多くは下から第2段程度しか残存せず、^{**} それ以上は片々となって周囲に散布していた。L地区北半では比較的保存状況が良好で、崩壊した状態のものもあり、全形をしりうるものも少なくない。整理の都合上、これらの埴輪のすべてについて検討する時間はなく、今回はL地区出土埴輪のうちから代表的なものの数点をえらんで報告する。

蓋形埴輪 1 蓋形埴輪 今回の調査で検出した形象埴輪は蓋形埴輪のみである。L地区北半で検出した1個体(1)と、K地区および6AFB-J地区で発見した細片とがある。1は基台部・笠部・頸部からなるが、各部分は直接に接合しない。埋没状況や胎土、製作技法からみて同一個体に属するものとみてよい。基台部は底径にくらべて口径の大きい断面逆台形の筒形につくる。幅約8cmの粘土帯を輪状に貼りあわせて基部となし、その上に粘土紐を巻上げて円筒部分を成形する。粘土紐の幅は約10cmで、内・外面に成形・調整時の相違があり、数回の巻上げ単位が確認できる。内面は指撫でと横位の刷毛目、外面は断続する斜位の刷毛目で調整する。基台の上寄りに右まわりで穿孔する一対の円孔がある。笠部の中心部はほぼ平坦に近いが、外周はわずかに外反しながら下がる。縁はほぼ垂直に近い立上りを呈している。笠部は基台部の上端に貼り足したもので、その接合部分の裏面に粘土紐をあてて補強する。縁は帯状の粘土を貼付し、その外面には横刷毛目をおこなうが、約5cmの間隔で強くおしつけて、ひだをあらわす。なお笠部の外周に右から左方向に施文する篋描きの円弧文があるが、その全体を知ることはできない。頸部は斜めに立上り、上端の籠状部分の断面をコ字形につくる。外面には丁寧な横刷毛目をおこない、内面には横方向の指撫でをおこなう。全体に焼成が良好で淡黄色を呈し、黒斑はない。付近から四方飾板の破片は発見されておらず、もともと四方飾板を挿入していない可能性がある。いずれにせよ、このような形態をとる蓋形埴輪は、5世紀の少数の古墳に類例をみる程度で、特異な形態といわざるをえない。復原高55cm、最大径64cmである。

7段の円筒埴輪

2 円筒埴輪 円筒埴輪としては1個体を復原することができた(2)。ただ、口縁部とそれ以下は直接に接合しない。しかし調整手法が連続する状況などから同一個体とみてよい。その形態は、底径にくらべて上部2段の直径がわずかに大きい円筒形を呈している。外面は6条の凸帯で等分し、7段にわけるとある。^{***} 底部から第3段、第5段にそれぞれ相対する1対の円孔を開き、上下2段の円孔の方向は対角線上に位置する。粘土を巻上げて成形し、第2段、第4段、

* 鰭付円筒埴輪は、円筒埴輪の概念に属するが、ここでは記述上両者を区別する。

** 円筒埴輪の部分名称。凸帯は下方から上方に第1凸帯、第2凸帯、……とよぶ。円筒底部から第1凸帯の間を第1段、第1凸帯と第2凸

帯の間を第2段とよび、凸帯の条数が増加することにより段数も増すことになる。ただ、最上段は口縁部とよぶこともある。

*** 『奈文研年報1970』p.36で凸帯4条とするのは訂正する。

第6段、第7段に巻上げ単位の痕跡をとどめる。^{*} 内面の調整は巻上げ単位の幅に対応して、第2段：指撫で、第4段：斜刷毛目、第6段：縦刷毛目+指撫で、第7段：横刷毛目と変化している。外面は縦刷毛目の調整後に凸帯を貼付し、各段の全幅または半幅を横刷毛目で調整し、その後再度凸帯に横撫での調整をおこなう。ただ、第3凸帯と4段目の接する部分では、調整の順序が逆になり、横刷毛目調整をあとにおこなう。これは、まず下部の成形・調整が第4段まで達し、ある程度かたまった状態で、それ以上の段についてさきの工程をくりかえすことを示す。第4段に見る巻上げ単位痕跡は他とことなり円筒の上下をわかつことになる。口縁部外面は断続する縦刷毛目の調整にとどまり、端部の外周に粘土紐を巻き凸帯状につくる。淡黄色を呈する軟質の埴輪であるが、焼成は均一である。なお、第2凸帯以上の外面全体に赤色塗彩をおこなう。復原高97cm、口径45cm、底径32.2cm。

円筒埴輪が底部の一段しか残存しないときには、後述の鱗付円筒埴輪との区別は容易でない。しかし、L地区では2に類似するものはなく、また、蓋形埴輪(1)は円筒埴輪(2)と近接して存在し、2の口径と1の基台部分の直径とはほぼ合致しているので、2の上に1をのせたことがかんがえられる。

蓋と円筒の
組合せ

3 鱗付円筒埴輪 鱗付円筒埴輪は上述の円筒埴輪に比して小さく、また、器高が低く、底径と口径の差があまりない。円筒部は6条の凸帯で7段にわけ両側に鱗を付す。その形態および透孔の形状などからA・Bの2種類にわかつことができる。

鱗付円筒埴輪A(3)は第7段、つまり口縁部の幅を他の段よりも狭くする。まず幅8cm程度で輪状の基部をつくり、その上に左回りに粘土紐を巻上げる。円筒部の外面には縦刷毛目をさきにおこない、ついで凸帯をつけて、その間に横刷毛目をおこない、凸帯に横撫でを施す。その際、口縁部の横刷毛目は連続せず、周囲を数回にわけておこなう。内面は丁寧な縦刷毛目で調整するが、それは7段にわかれ、外面の調整の区切り及び断面の継ぎ目とも対応し、巻上げ単位の痕跡として理解できる。口縁部内面のみは横刷毛目をおこなう。円筒の両側には数条の縦に長い刻み目をいれて鱗を貼りつける。鱗は粘土板を口縁端部から第2凸帯までの長さで、上端を長方形に下端を斜めに篋で裁ちおとす。その表裏には内方から外方への斜刷毛目をおこない、端面は指撫でで整えている。透孔は鱗部を左右に置く場合、円筒部の前後で1対をなす位置に穿孔しており、その位置と孔の形はつぎの通りである。第2段中央：円形孔、第4段中央：長方形孔、第4段右：円形孔、第5段左：三角形孔、第6段中央：長方形孔、第7段左右：三角形孔。この場合、三角形孔は他の孔よりも小さい。第5段外面の鱗に近い部分に4本の直線からなる篋描き文様があるが、全形不明である。茶褐色を呈し、軟質であるが黒斑はなく、外面の第2凸帯以上には赤色塗彩をおこなっている。高さ82cm、円筒底径35.5cm、円筒口径38.7cm、最大幅(鱗を含む)52cm。

もう1個の鱗付円筒埴輪A(4)はおおむね3と同じ形態をとるが、円筒内面の調整と透孔の位置がことなる。内面には粘土紐の痕跡をとどめ、下位から指撫で、斜刷毛目、縦刷毛目、横撫での順に調整する。およそ第3凸帯、第5凸帯、第6凸帯に巻上げ単位の痕跡がみとめられるが、第3凸帯の部分がとくに顕著である。透孔は第3段中央：円形孔、第4段中央：長方形

^{*} 円筒の検討を通じて、成形に際しては下方から上方まで一気に粘土紐を巻上げたのではなく一定の幅を巻きあげた段階で一旦休止し、その

後に上方部分をつぎたしている。ここでは一気に巻上げた部分を巻上げ単位とよぶことにする。

孔、第5段左：三角形孔、第5段右：円形孔、第6段中央：長方形孔、第7段左右：三角形孔とする。第5段右の円形孔は篋描き沈線で下半を囲む。鱗のつくりは3と変らないが、下端が第2凸帯に接していない。高さ78cm、円筒底径33cm、円筒口径40.5cm、最大幅50.5cm。

鱗付円筒埴輪Aは埴輪列の大半を占めるが、内面調整を縦刷毛目のみでおこなう3と、指撫で混用する4との相違、さらには透孔位置などが全体のなかでどのような位置を占めるかなどについては検討をおこなっていない。

鱗付円筒埴輪Bについては1個体を復原した(5)。5は口縁部とそれ以下とは直接に接合できない。3・4に比べて全体に大作りである。円筒部は6条の凸帯をめぐらし、7段にわけられる。第7段が他よりも狭いことは3、4と同じである。外面の調整は、縦刷毛目をさきにおこない、のちに横刷毛目をおこなう。内面の調整は、下から指撫で、斜刷毛目、縦刷毛目の順であるが、上部の縦刷毛目の凸帯裏にあたる部分は、凸帯貼付時の指撫によって消去している。鱗は大きく、第1凸帯からはじまり口縁端にまでおよぶのであろう。その下部はおおよそ第3段に相当するあたりから斜めに裁ちおとす。また、鱗の片面には2条の沈線による縁取りをおこなっている。淡黄色を呈し、比較的軟質である。復原高90.7cm、円筒底径32cm、円筒口径36.6cm、最大幅56.6cm。外堤の埴輪列のなかでは異例に属する。^{*}

舟の線刻 鱗付円筒埴輪のなかに、舟を篋で描いたものがある。6は4に類する埴輪の第5段中央やや右寄りに描いたものとみられる。絵は1本の弧線を配し、それに9本の斜線を交叉するもので、舟体と櫓を表現したものとみられる。

須恵器 Pトレンチの葦石上で、須恵器蓋の破片を発見した。頂部の稜線が鈍く、頂部との境に凹線をいれる。口縁部はほぼ直立し、端部をまるく仕上げている。硬質で暗灰青色を呈する。形態からすれば、陶邑古窯址群のTK10型式に類似する(fig.24-4)。

SD732・SD734出土の土器 外堤にそって南流するSD734の堆積層は大きく3層にわかれ、各層から土器片や埴輪片を発見した。埴輪は別として、遺物の多くは平城京造営以後のものであり、その出土量は比較的多い。最下層の第3層からは奈良時代前半の土師器・須恵器を発見し、上層の第2・1層からは奈良時代後半から平安時代中頃に至る土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器などが出土した(fig.21)。

7・8・10は第3層の土器である。7・8はa₀手法で調整する土師器の小型皿。10は底部外面に篋切痕をとどめる須恵器の皿BⅡで、第Ⅰ群土器に属する。9は第2層、11は第1層から出土した灰釉陶器である。9は壺の底部で、体部の内外をロクロで仕上げ、外底面に糸切痕をとどめる。11は体部外面は平行叩きをカキ目で消し、内面に同心円のあて板痕がある。緑釉陶器としては、杯Bの破片がある。断面三角形を呈する付け高台をつけ、底部外面には糸切り痕、内面には三又トチンの痕跡がある。釉薬が底部外面以外の全面にかかっている。硬陶。

SD734の東側に位置する外濠SD732の埋立土からも、奈良時代前半の土器が出土している。1～6はその主な須恵器である。いずれもSD485土器の特徴とよく一致している。2を除いた以外はすべてⅠ群土器に属する。二彩陶器の細片が2点ある(COLOR PLATE 2)。器形のわかるものは、口径10.1cm前後の小型皿に復原できるもので、口縁端部はまるくおさめ、内外面に緑と白の釉をかける。軟陶。

^{*} 他の古墳の場合での鱗付円筒埴輪では、この種が一般的で、鱗付円筒埴輪Aのほうが異形である。

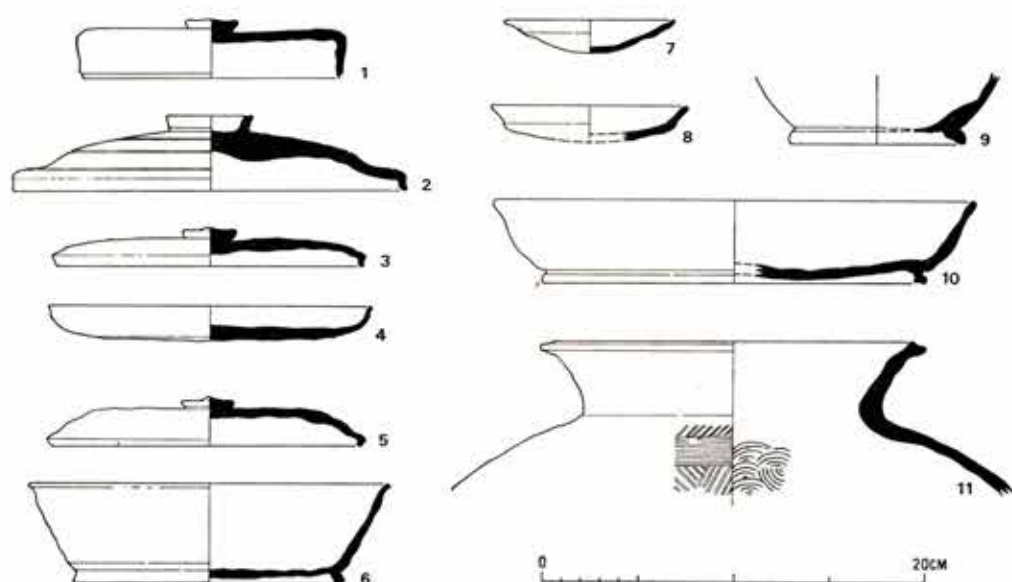


fig.21 SD732・SD734出土土器実測図

造り出しの土器 墳丘の造出し裾付近で、若干の土器片を採集した。それは、須恵器片を主とし、少量の土師器片と土製品を含む。土器片は、いずれも細片でかつ池水で洗われているため表面が著しく風化している。全形を復原しうるものはないが、明らかに同一個体とみられるものがあり、本来は造出しに供献されていた土器類が水中に転落したものであろう。

1 須恵器 胎土はいずれも粗い砂をふくみ、良好ではない。焼成の良好なものと悪いものがあり、焼ひずみもみられる。1：灰褐色を呈し、硬質のもの。2：明褐灰色を呈し、やや硬質のもの。3：明褐白色を呈し、軟質のものが存在する。いずれも窖窯で焼成したものである。破片数からすれば1が少なく、2が多い。ほとんどの土器には焼成前に丹塗りを施している。焼成段階で温度が高くなったものはくすんだ暗褐色を呈し、温度の低いものは明調の丹色を呈している。器はいずれもロクロで成形している。ロクロ無でを基本とし、櫛描き波状文、櫛描き列点文、カキ目などで表面を調整するが、きわめて鋭い輪郭を呈している。器種としては、器台・甕・壺・蓋などがみとめられる。7，8，9は蓋杯で、直立する口縁をつける。高杯の全体をしるのは困難であるが、杯部口縁と底部との境に袂をつくるもの(11)，境が不明瞭のもの(12)がある。17は大型の高杯であろう。小型の壺(10・13～16)は比較的多いが、いずれも口縁と頸との間でくびれ、口縁が外傾する。頸部と肩部に櫛描き波状文をいれるものもある。18は大型の壺。頸と肩に櫛描き波状文を配する。器台は2個体以上ある。19はほぼ全形のうかがえるもの、杯に台を貼りあわせた甕の刻み目が明瞭に見える。櫛描き波状文、櫛描き列点文、凹線文などで飾り、裾ひろがりの台脚に長方形の透孔をあける。なお、実測図はすべて図上復原のため、必ずしも正確でない。*

2 土師器 土師器としては、小高杯の脚部や底部の突出する鉢の破片がある。少量でしかも細片であるため、細部については不明である。土師質の土製品が3点(22～24)ある。そのうち、2点は小魚をあらわし、1点は棒状の器である。いずれも手づくねでつくり、素朴な表現であるが、特徴をよくとらえている。

* 須恵器の観察にあたっては奈良大学助教授田辺昭三氏の教示をえた。

2 平塚1号墳

A 遺構 (PLAN22, PL.32・33)

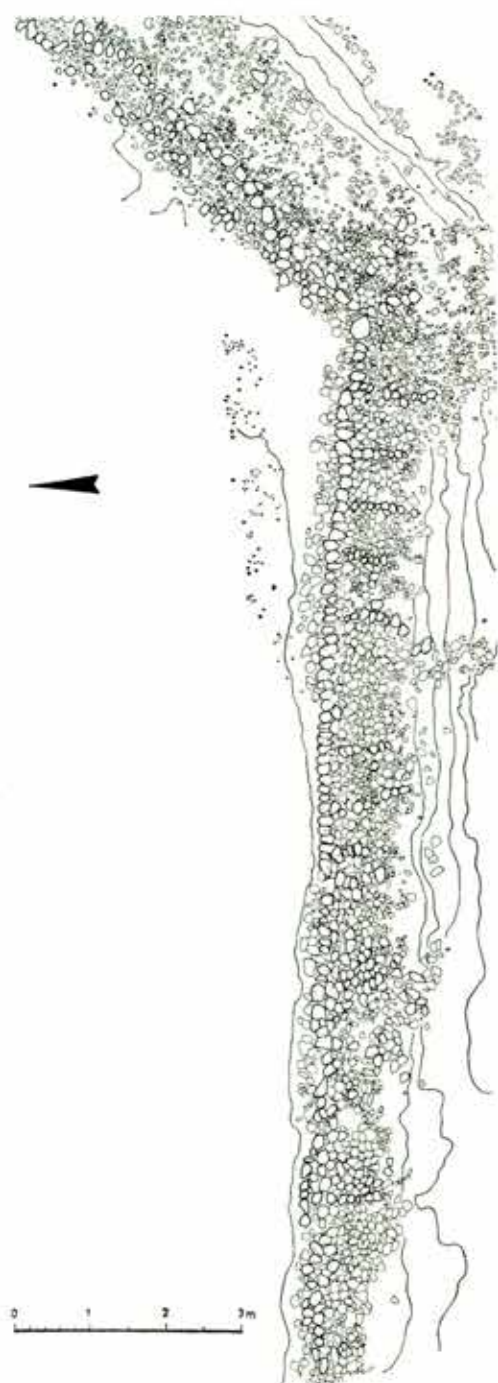


fig.22 平塚1号墳葺石実測図

6AFB-H・I地区において、西面する帆立貝式の前方後円墳の残骸を発見した。遺構は奈良平安時代の整地面下に存在し、墳丘の前方部から後円部にかけての一部、墳丘を囲繞する周濠からなる。古墳の破壊は、平城京造営に際しての条坊設定の段階、つまり第1次整地時期におこなわれ、前方部の削平と周濠の埋立てが同時になされている。しかし、北濠はその後も窪地として残る。

周濠は前方部の北・南・西面部分で検出し北濠の最大幅(くびれ部上縁と北岸の間)は21.m, 最小幅(前方部南西隅付近上縁と北岸との間)が15.5mである。南濠の最大幅(くびれ部上縁と南岸の間)22.5m, 最小幅20mである。西濠については幅6.5mを発掘したが、西岸は発掘区外にあり確認していない。周濠南北兩岸の最大距離は68mである。周濠は素掘りの濠で、南北兩岸には築堤や内斜面に設ける葺石は存在しない。濠の底には多少の凹凸が存するが、基本的には平坦面に掘っている。ただ旧地形に従うのか、南西に向って少しく低くなる。濠には黒灰色の粘土ないしは灰褐色砂質土が、30cm内外の厚さで堆積し、堆積土には水性植物の毛根がみられ、一応の帯水状況がかんがえられる(fig.5)。

周濠に向って下降する墳丘斜面には葺石が残存する。河原石を用いて墳丘の裏込土の上に葺く。葺石面は前方部で $26^{\circ}30'$ 前後、後円部で $33^{\circ}40'$ 前後の傾斜角をもつが、北面にくらべて南面の傾斜角の方が強い。葺石は墳丘最下縁に径25cm内外の大型石を基石としてならべ、その上部に下方から上方に河原石を小口積にして葺くのであるが、およそ1.2~1.5mの間隔で中型の仕切り石を基石に直交してならべ、その間を径15cm内外の小型石で埋める。葺石をたどっていくと墳丘の平面形がわかる。それによれば、前方部の規模は東西全長18m, くびれ部幅26.8m, 前縁付近の幅28.6mとなる。後円部の下

縁は南面くびれ部から東南方へ18.5m、北面くびれ部の東方へ6m分の長さを検出した。周濠 墳丘の復原
 底部の高低差によるためか、正円弧を描いていない。発掘範囲も狭く復原の困難なところであるが、およそ直径50m前後の規模が想定できる。以上のようなことから、墳丘の全長が約70mで、その周囲に馬蹄型の濠をめぐらす帆立貝式前方後円墳がかんがえられるのである。

前方部西北隅と南面くびれ部を結ぶ線を境にして遺構検出面の土層が相違する。すなわち、東北部では黄色粘土の地山となり、西南部では暗褐色バラス混り土による整地土である。前方部地山部分と整地土の部分にわたって墳丘築成以前に属する蛇行状素掘溝(SD461)が存在していることから、この整地が古墳造営前におこなわれていることがわかる。

後円部の西北部が一段高く残存しており、前方部にくらべて墳丘の状況を比較的良好とどめている。ここでは、後円部盛土の一部とそれをめぐる円筒埴輪列を検出した。後円部付近の地山は海拔73.5~73.6mで、その上部は盛土で築成する。まず、黒色粘土、つぎに暗褐色土と含礫黄褐色土を盛って築成するのであるが、現在では1.5mの封土をとどめるにすぎない。円筒埴輪列は墳丘第2段の裾をめぐる。埴輪位置を壺掘りにして掘えつけたのであろうが、掘形は検出できなかった。後円部をめぐる円筒埴輪7本、前方部にのびる円筒埴輪1本をとどめる。埴輪はいずれも基部しか残存していないけれども、円筒埴輪の凸帯を墳丘第1段の高さとするならば、その海拔高は74m前後となる。

後円部に残存する盛土が、圍繞する埴輪列よりも高いことから、後円部が2段築であったことがうかがえる。他方、埴輪列が後円部の西南にまでめぐっていることから、前方部が1段であったことがわかる。前方部北面の葦石の傾斜角を海拔74mまで延長すると第1段築の高さは1.7m前後となり、葦石の幅は約3.3m、後円部南面葦石傾斜角を74mまで延長すると葦石の幅は約3.5mとなる。

検出した周濠の岸は、北岸と南岸とで約1mの高低差を示している。しかし、本来墳丘第1段の高さ程度の築堤をめぐらしたもののか、旧地形に従う北高南低の低い岸にとどまるものであったかについては明らかでない。なお、復原しうる墳丘第1段の高さは、ウワナベ古墳の外堤上面とほぼ等しい。

B 遺 物 (PL.107・108)

平塚1号墳の周濠および残存葦石の直上には、形象埴輪や円筒埴輪片が散在し、若干の土器片も混じっていた。後円部をめぐる円筒埴輪6本を原位置で検出したほかは、いずれも原位置を遊離していた。しかし、北くびれ部の葦石付近から水鳥形埴輪を集中して検出し、家形埴輪や蓋形埴輪などを前方部の南北斜面及び濠中で検出した。このことから、北くびれ部付近に水鳥形埴輪をおき、前方部頂上に家形埴輪などが配置されていたことが推測できる。

形象埴輪 形象埴輪としては、家形埴輪・蓋形埴輪・水鳥形埴輪・馬形埴輪などがあつた。しかし、いずれも細片であり全形をしることが困難である。説明にあたっては個々の寸法は略することとする。

1 家形埴輪(25~40) 家形埴輪の破片には屋根・破風・軒・裾台・壁・柱などの部分がある 家
 が、それらをあわせて全体をうかがうことはできない。25は棟に接する破風板頂部の断片であ

る。上端をまるくつくる扁平な板で、正面の合掌部に棟端を貼りつけた痕跡があり、他面には丸棟の一部をとどめる。26は破風からのぞく棟端である。断面が半円形を呈する木口をそぎおとし、木口面にはカマボコ型の周縁にそって一条の沈線文を施す。27は丸棟の一部である。押縁を扁平凸帯であらわし、その間を縦刷毛目で調整する。25・26とともに同一個体をなす入母屋造りの屋根部分を構成するものであろう。

28・29は入母屋造りの四柱屋根部分の破片である。28は四柱屋根の上方切妻屋根に近い部分であり、29は軒先に近い部分で裏面は壁と接するために厚さを増している。ともに2条を1組とする横線を2段にいれ、その間を直線で区切る格子の篋描き文様を施す。

30は一応切妻造りの破風板に想定する。縁が弧状を呈する板の表裏に篋描き沈線文をいれるが、一面の外縁に1線をおき、その内側に2条1組の沈線文をいれる。他面は縁取りの1線だけである。31は丸棟にのせた棟飾り、ないしは押縁をあらわすものであろう。丸棟の頂部にそって横長の2条の粘土帯を人字形に貼りあわせたもので、先端の両面から刻目をいれて格子文様をあらわす。30・31は黄褐色を呈する軟質の埴輪片で同一個体とかがえられる。

32は切妻の梁をを扁平な凸帯で表現したものであろう。33は壁と柱の部分である。壁には篋できりとした部分をとどめ、入口ないしは窓に接する位置にあたることわかる。柱は扁平な凸帯を貼りたしてあらわす。34は裾台部分と柱部分の破片である。柱は33と同じく扁平な凸帯であらわすが、入口にあたるらしく框をあらわす部分をとどめる。上面の平坦な裾台部分は柱を貼付けたのちに、貼合したものである。37は柱を篋描き沈線であらわす隅角部でそれに接する壁に2条の篋描き沈線を入れたのは、壁の横棧をあらわしているであろう。35・36も壁の破片であり、横棧を3条沈線で表わす。38は左右を吹放ちにする柱の破片である。

40は裾台の隅角部分である。壁に接する部分は上面を平坦にし、側面を斜めに垂下する。外面は丁寧な刷毛目で調整する。39も垂下する裾台部分の破片で、沈線文で飾る。

蓋 2 蓋形埴輪 (45~50) 蓋形埴輪の破片は比較的多く、頸部および笠部で3個体以上、四方飾板でも3個体以上を確認した。基台部については、円筒埴輪と識別できず、不明である。

49は北濠で検出した。各部分が直接に合致しないが、胎土、焼成、曲率などから同一個体とみられる。半球形の笠部の頂点に円筒形の頸を付す。頸の上端と下端には各1条の扁平凸帯めぐらす。笠部の中程に1条の扁平凸帯をめぐらし、凸帯と縁との間を2条の横線で画し、その間に2条1組の縦線を上下千鳥に配する。成形は基台部からつくりはじめ、笠部の上半部におよび、その後笠部の下部を貼りたしている。頸部の内外および笠部外面は横刷毛目をおこない、笠部内面は横撫でによって調整する。なお、頸部外面に丹塗痕跡を残す。高さ(笠から頸まで)29.4cm、直径63cmが推定できる。50は小片であるが、頂部の側面に鱗をつけた痕跡があり、49と異なる形態の笠部の存在が推測できる。45はほぼ全形がうかがわれる四方飾板である。受皿を中心にして、翼形の飾板を十字形に貼合したもので、各板の上下には鱗状の飾りを小粘土帯を貼りたしてあらわす。受皿以下の軸部は欠失してない。四方飾りの各側面は篋削りによって形を整える。板の表裏は刷毛目の調整をおこなったのち、篋描きの沈線文様を施す。板と上鱗は弧線で縁取りをおこない、板の中央には内部を3区画する曲長方形を描く。下鱗には縁取りがなく、直線で全体を3区画する。推定高32cm、最大幅74cm。46は類似する四方飾板の破片だが、板中央の曲長方形の中央区に透孔をつくる。これに類する破片は多い。

3 水鳥形埴輪 (51~56) 頭部6個、頸部3個、羽部4個の破片があるが、いずれも粘土紐で水鳥巻上げてつくる。いずれも破片で接合できるものはない。51・52・53は首を立てる水鳥を表現したものである。直立する頸部に中空の頭部をつけるが、嘴は欠失する。表面を刷毛目と撫でによって調整し、両眼を竹管であらわし、両側に円形浮文で耳らしきものをあらわす。54は首を前方にのぼす水鳥を表現したものである。頭部と首との境は不明瞭であり、嘴は基部を残して欠失する。頸が胴に接する胸の付近はわずかに残存するが、胴部は欠失している。表面は指撫でで調整し、竹管文で両眼をあらわすが耳らしきものはない。頭・胸の部分に動黒色の黒斑があるほかは黄褐色を呈する。胴部の破片では、頸まわりの羽毛を沈線で表現したもの、尻・脇腹部分とかがえられるものがある。それらの外面はいずれも横撫でで調整する。半楕円形を重ねて羽根を表現したもの(55)と、平行線で尾羽根を表現したものがある(56)。

4 馬形埴輪 (57~59) 鞍・鍔・脚の部分の破片である。いずれも北濠から出土した。57は脚馬の部分である。粘土紐を巻上げて断面が卵形を呈する筒をつくり、下端に蹄をあらわす。58は鞍の後輪から尻繫の部分である。凸帯を貼付けて後輪をあらわし、後輪の磯付近から尻にかけて4条の凸帯を貼りつけて尻繫の革帯をあらわす。内側の2条は交叉する。馬の背から尻にかけては刷毛目で調整し、尻繫は撫で調整したのち、篋で側面を切りおとしている。59は鍔の部分の2片である。輪鍔の部分を粘土板に貼りつけた表現であるが、粘土板には篋で裁ちおとした側面をとどめており、障泥板上に鍔をおいたものであることがわかる。なお粘土板の剝離面には胴に貼合した際の沈線をとどめている。輪鍔の一部に丹塗痕跡をとどめる。これらのほかに鍔の小片が3片あるが、いずれも障泥板に貼付したものである。このことから、少なくとも2頭以上の馬形埴輪が存在したことがわかる。他に扁平な板に2個を1組とする刺突文をあらわすものがあり、馬形埴輪の部品の1部であろうか。

5 不明形象埴輪 (41~44) 42・43は長方形の粘土板に竹管文を施したものである。原形はゆるやかな弧形を呈していたらしく、外縁が内彎する。共に外彎する内縁に剝離面があり、本体へ貼りつけたことがうかがわれるが、41の両側縁には剝離面がなく、縁が雲形の凹凸を呈するようであるから、先端の部分とおもわれる。また剝離面の状況からすれば、42と43は連続する部分の破片ではなく、左右にわかれる。いずれも一面に4個を1組とする竹管文を施し、丹塗り痕跡をとどめる。44は板の端部をとどめるものである。端部はわずかに弧を描くようであり、外面に2条の沈線と綾杉文の篋描き文様をいれる。盾形埴輪の外縁であろうか。

円筒埴輪 全形をとどめる円筒埴輪はない。60は上下の破片を一体に組あわせたもので、必ずしも同一個体ではない。4条の凸帯で5段にわける円筒の第3段と第4段に1対の円形孔を穿ち、各段の孔は互に直角方向に位置する。外面には縦刷毛目をおこなったのち凸帯をつけ、横刷毛目を施す。刷毛目は粗く、比較的乱雑で、横刷毛目は約5cmの間隔をおいて強弱をつけている。内面の調整は乱雑な斜方向の指撫ででおこなうが、第4・5段の内面は左回りの横または斜め方向の刷毛目で調整する。全体に黄褐色を呈する軟質で動黒色の黒斑の部分がある。復原高62cm、口径33cm、底径20cm。63は肩部から頸にかけての朝顔形埴輪の破片である。頸部に貼付した凸帯の痕跡をとどめる。円筒部と肩部との境に一凸帯を貼りつけ、その下段に1対の円孔を穿つ。内外の調整は円筒埴輪とかわらない。円筒部直径29.5cm。

須恵器 北濠の第2次整地層から8世紀初頭の甕が出土している(fig.24-1)。

3 平塚2号墳

A 遺 構 (PLAN.22, PL.34・35)

6AFB-G・H地区で西面する前方後円墳の前方部、およびそれを圍繞する周濠を検出した。

前方後円墳 墳丘の削平は著しく、もっとも保存のよい部分で高さ70cm前後をとどめるにすぎない。墳丘前方部の葦石は辛じて痕跡をとどめるにすぎず、南濠は削平されて痕跡すらとどめていない。

周濠は前方部の北面と西面で検出した。西濠の幅(前方部中央の残存葦石上縁と西岸上縁を結ぶ距離)は10m内外であるが、南方になるにしたがって濠幅を増している。北濠の幅(前方部北面残存葦石上縁と北岸上縁を結ぶ距離)は8m内外である。濠の西北隅角は直角にならず、北岸が約 80° の角度で西岸にとりつき、東方に向うにしたがって南に振れている。さらに、北岸は平塚1号墳南岸と共有し、地山で幅約6.5mの外堤をもっている。周濠の底部はほぼ平坦面をなすが、東北方が高く、西北方が低い。底には20cm内外の厚さで褐色粗砂や黒灰色粘土が堆積し、帯水した状況をとどめる。また、墳丘に接する部分には落下した葦石と埴輪片が混在した(fig. 5)。

墳丘の裾部には、河原石でふいた葦石が残存する。葦石は斜面に褐色土と黒灰色の裏込め土を敷いたのち、1号墳と同じ方法でふく。すなわち墳丘下縁に径25cm内外の大型の河原石を基石としてならべ、その上部に1~2mの間隔をおいて基石に直交する1条の仕切り石を積みあげる。この仕切り石と仕切り石の間は、径15cm内外の小型石で埋める。西面葦石下縁はほぼ全長分を検出したが、北西隅付近では奈良時代のSD485によって大きくえぐられている。また南方では葦石をSG520の洲浜として再利用しているため、比較的保存がよかった。南面葦石は破壊が著しく辛じて残石をとどめるにすぎない。前方部北西隅の角度は約 $74^{\circ}30'$ であり、北面葦石の傾斜角 29° 、西面葦石の傾斜角は約 28° である。

前方部墳丘の西面下縁の全長は41m、北面下縁は21mを検出したが、前方部はさらに東方と南方にのびる。北濠と同規模の南濠を想定するならば、墳丘下縁で東西長21m以上、南北幅42.5m(復原値)の前方部に、8m内外の幅で周濠がめぐっていたことになる。前方部の遺構は地山面で検出したが、西面葦石付近で古墳築成以前の溝を確認している。なお、平塚1号墳後円部北葦石下縁が海拔72.2m前後にあり、2号墳前方部北葦石下縁が海拔71.0m前後にあることからして、2号墳の墳丘が全体的に1号墳よりも1m前後低くかったことが想像できる。

後円部についてはまったく手掛りをつかんでいないが、おそらく東三坊大路付近がほぼ中心たにあたるため、平城京造営時に壊滅的に破壊されているであろう。



fig. 23 平塚2号墳
葦石実測図

B 遺 物 (PL.109)

平塚2号墳からは、形象埴輪、円筒埴輪、須恵器を検出した。それらは、前方部の北面、西北隅、西面、南面にわたる漆ないしは葺石上面で破片になって発見されたものであり、原位置で検出したものはない。出土地点別の埴輪の種類は平塚1号墳と同じような傾向を示す。すなわち、前方部西面には動物及び盾の埴輪があり、南面くびれ部付近には水鳥が多い。家形・蓋形埴輪や円筒埴輪は各所に散在していた。

埴 輪 形象埴輪としては、家型埴輪・蓋形埴輪・盾形埴輪・短甲形埴輪・水鳥形埴輪・動物形埴輪があり、ほかに円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪などがある。それらはいずれも細片であり全形をうかがうことはできない。

1 家形埴輪 (63~68) 63は切妻屋根の破風板の剝離した部分である。沈線で網代と押縁をあらわす。棟木端は欠落するが、妻通り壁の痕跡をとどめる。他の屋根の破片に、押縁を扁平な凸帯であらわすものがある。そのほか格子文様で網代をあらわすものもある。屋根はまず壁の上端から棟方向に粘土紐を貼りたしのちに軒先を貼ったようである。軒裏には往々にして軒先の荷重を維持するために、粘土紐の補強がみられる。屋根の外面には刷毛目の調整を施す。

64は高床式建物床部分の破片である。下の柱部分と床以上の壁体とを一枚の粘土板につくり、柱部分は扁平凸帯を貼りつけてあらわすが下柱は篋で切りぬいてあらわす。外面中程には上面が平坦な、く字形の縁をつける。また、縁よりも下位の内側に横位の粘土帯を貼りつけて床をあらわす。上・下の柱および縁側の外面には幾何学的な篋描き文様を施す。なお、縁側の裏に位置する部分に下柱の位置を決める際の篋描きをとどめている。65も高床縁部の破片である。剝離痕跡から、それが柱位置にあたるのがわかる。縁側面には65と同様の幾何学的文様を篋描きで施している。つくり方は64とかわらない。66は据台部の隅角部分の破片である。ほかに妻通りと側通りの破片がある。その形は上面を平坦にし、側縁を斜めに垂下し、その外面には篋描きの格子文様を施す。67は壁体部分の破片であり、柱を沈線によってあらわす。68は厚手で扁平な破片である。篋描き文で円弧をあらわす。裏面に剝落の痕跡があって疑問もあるが、壁体の一部にかんがえておく。

2 蓋形埴輪 (69~75) 蓋形埴輪としては、笠部、四方飾板、軸部のなどの破片があるが、1個体にまとまるものはない。72~75は笠部の破片である。頸部の状況は不明であるが、それによると、まず基台部の上端から粘土紐を貼りたして笠の上半をつくり、その後下半部をつくるのがわかる。笠部の外面には横刷毛目を施し、内面は指撫でによって調整する。縁部はほぼ直立し、外面にひだをあらわすが、刷毛目の強弱によってあらわす(74)ものと、沈線であらわす(75)ものがある。71は四方飾板を支える軸部である。受皿の縁部を欠くが、その内面には飾板の位置を示す2本1組の刻線を十字にいている。69・70は四方飾板の破片であるが全形を知ることはできない。両面に篋描き文様を描くが、構図は平塚1号墳とことなる。

3 盾形埴輪 (76・77) いずれも円筒に粘土板を貼りつけたものである。76は側縁部分の破片である。縁端部を篋で裁ちおとし、撫でによって調整する。内面は指撫での調整をおこない、円筒に接する部分の間隙に別の粘土を充填する。また側縁を補強するためある間隔をおいて

横位の粘土帯を貼りつける。表面には、綾杉文、鋸歯文などの文様を施している。淡白黄色を呈する硬質で、内外ともに丹塗をおこなう。77も76と同じつくりの側縁部分の破片である。ただ文様が76に比して簡略であり、別個体のものである。

三角板式短甲

4 短甲形埴輪 (78) 短甲と草摺の接する部分と草摺部の細片がある。78は甲部に連なる扁円筒形の基台部に草摺を貼りたしている。表面には三角板式の短甲を推測しうる篋描き文と、腰帯を示す斜格子文をあらわす。草摺部の破片は、横線をいれ、その間に線鋸歯文を施して鍼しの状況をあらわすものである。

水鳥 5 水鳥形埴輪 (79~81) 各部分の小片で、全形をうかがうことはできない。80は翼部分の破片である。粘土板の側縁を翼形に削りおとしている。羽根は表現せず、胴部との接合状況は不明である。淡黄色を呈し、硬質。81は足爪部分の破片で、基台とおもわれる粘土板の上に3爪を貼りつけているが1爪を欠失している。79は頭部の破片である。断面が楕円形を呈する頸部に球形の頭部と、突出する嘴をつくる。嘴は横線で上下にわかち、基部は刺突文で2鼻孔をあらわすしている。顔面の中央に竹管で両眼をあらわしている。粘土紐巻上げで中空につくる。胎土は黄白色を呈し、軟質である。

6 動物形埴輪 (82~85) 動物をあらわす埴輪片があるが、その種類を確定することはできなかった。82は左後脚腿部の破片である。残存する下部はほぼ脛部に位置するのであろうが、ここでは断面を卵形とし、それ以上を円形に粘土紐を巻上げている。外面は指撫でで調整する。83は脛部から足先に至る管状の破片である。粘土板を断面卵形に折曲げてつくる。外面は上から下への指撫でで調整する。85も断面円形を呈する脚の破片であるが、足先をつくりだし、三角形の切込みをいれており、偶蹄目の動物であることがわかる。鹿の脚であろうか。84は頭部の破片である。中空の頭部の正面は平坦をなして粘土でふさぎ刺突文で2個の鼻孔を刻線で口をあらわす。目は紡錘形に切込んで表わしている。色調・土質から85と同一個体をなす可能性もあるが、表現からは猪の頭部であろう。

猪

円筒埴輪 (86・87) 普通の円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪とがある。いずれも破片で全形をしることができない。ともに底径20cm前後、約13cmの間隔で凸帯をめくらしているようである。

円筒埴輪 (87)は、第3段までしかとどめないが、本来は4条の凸帯で5段に区画するものであろう。透孔は円形で第2段に配するものと第3段に配するものがある。まず、粘土帯で第1段の基部をつくり、それ以上を粘土紐巻上げでつくる。外面は縦刷毛目の後、凸帯を貼り、各段を横刷毛目で調整する。その際、第2段以上は約5cmの間隔をおいて強弱をつけるが、第1段は横刷毛目は連続せず工具を器面から離し、さきの刷毛目に重ねる。また、第1段の横刷毛目を略するものもある。そのほか、第2段以上で、横刷毛目のあとで、再度部分的に縦刷毛目を施すものがみられる。内面は左上方から右下方への指撫でによって調整するが、第2凸帯を境にして上下が不連続を呈する。全体に粗い作りで、淡黄色を呈する軟質であり、黒斑はない。

朝顔形埴輪 (86)は、口縁部を欠き円筒部と口縁部との境をとどめる破片によって存在をしるにすぎない。頸部に凸帯をめくらし、口縁部は外反する。肩部は弧線を描いて円筒部の凸帯に至る。肩部外面にはさきに縦刷毛目をおこなったのちに断続する横刷毛目をおこない内面は撫で調整する。口縁部外面は縦刷毛目で、内面は斜刷毛目を施す。肩部下の凸帯の下段に円形孔を穿つものがあり、篋描沈線文を入れるものもある。86は砂粒が多く赤褐色を呈する極硬質である。



fig.24 古墳出土須恵器実測図 1:平塚1号墳、2・3:平塚2号墳 4:ウナベ古墳

須恵器 前方部西濠から埴輪類に混って須恵器を検出した。蓋(2)と杯(3)がある(fig.21)。

蓋(2) 頂部と口縁部との間へ稜線は鈍く、比較的扁平な頂部には左回りのロクロ削りをおこなう。口縁端部は少しく内傾する。直径14.2cm。

杯(3) やや内傾する口縁端部と蓋受部の端部とをまるくおさめる。平らな底部外面は左回りのロクロ削りとする。口径19.3cm、高さ4.8cm。

須恵器はいずれも表面に青灰色を呈する部分もあるが、内面は暗赤紫色を呈し風化が著しい。硬質である。これらの須恵器が平塚2号墳築成時のものか、否かについては決め手はないが、おそらく墳丘上に置かれたものであろう。陶器古窯群TK10型式に類似する。

4 古墳の検討

今回の発掘調査で検出した古墳に関連する遺構は、いずれも局部ないしは残骸にとどまり、3古墳を比較するじゅうぶんな資料をえていない。

古墳の構造 ウナベ古墳東外堤の調査によって、外堤の両肩に埴輪列をめぐらし、その内側の斜面に葺石を配し、外側に素掘りの濠を一重にめぐらしていることが判明した。埴輪列には原則として鱗付円筒埴輪を用い、処々に蓋形埴輪をのせた円筒埴輪をおいた状況がうかがえた。これはかつて調査されている陪冢大和5号墳の埴輪列の状況とよく一致している。^{*} 外側の濠は、奈良時代に埋立がおこなわれ、外堤に添って新しい溝(SD734)が開穿された。この溝は奈良時代の道路の側溝としてかんがえることもできるが、施釉陶器などを含む比較的多い遺物からすれば、奈良時代における陵墓の修築ないしはその祭祀に関連する遺構かもしれない。いずれにせよ、今日の調査でウナベ古墳の規模を推測しえたことは大きな収穫であった。

ウナベ古墳

平塚1号墳・2号墳は西面する帆立貝式前方後円墳と前方後円墳であり、ともに周濠をめぐらしている。また、墳丘には葺石と埴輪を配するが、外堤にはそのような施設がなかった。破壊状況からすれば、平塚1号墳のほうがよくのこっている。すなわち、平塚2号墳は平城京条坊設置時に壊滅的に破壊されたが、平塚1号墳は前方部および周濠の破壊にとどまり、後円部は十六坪の居住地内に築山風にとりこまれている。この後円部の一部が、1869年の鉄道開設時まで存続したであろうことは、江戸時代の法華寺領田図、1925年に作成された「奈良市法華寺町字限地図」によって明らかである。このような観点からすれば、現在近傍の不退寺境内に保存されている凝灰岩の石棺棺身や、横浜市三景園に保存されている伝法華寺出土の石棺蓋が、この古墳に属する疑いもでてこよう。

平塚1・2号墳

^{*} 奈良県『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報第4輯』1949

埴輪 ウワナベ古墳東外堤で検出した円筒埴輪および鱗付円筒埴輪は、陪冢群の1基である大和5号墳の埴輪、調査時に採集した埴丘部から流出した埴輪片とよく一致しており、ウワナベ古墳築成時のものとみてよい。

円筒埴輪・鱗付円筒埴輪はともに、口径と底径との差があまりない7段の円筒形につくる。その製作工程はつぎのように推測した。まず粘土帯で基部をつくり、その上に粘土紐を巻上げ、円筒を形成する。円筒埴輪では2段分を巻上げ単位とし、全体を4巻上げ単位で仕上げる。その成形は一気におこなったものではなく、第2巻上げ単位をつみあげたのち一旦乾燥をおこない、その後に第3巻上げ単位以上をつみあげる。外面の調整ではさきに縦刷毛目をかけ、その上に一定の間隔をおいて休止する断続横刷毛目をおこなう。内面の調整は指撫でを主とし、縦刷毛目と横刷毛目を併用する。鱗付円筒埴輪もおおむね円筒埴輪に準じてつくるが、その一部に巻上げ単位が凸帯と対応して、7巻上げ単位でつくるものがある(鱗付円筒埴輪A)。外面調整は縦刷毛目と断続横刷毛目とでおこない、内面調整は巻上げ単位ごとの縦刷毛目である。このような成形・調整技法は、円筒埴輪と鱗付円筒埴輪Bのそれにくらべてより古い要素であり、ウワナベ古墳の埴輪には新旧の技法が共存していることになる。

技法の新旧

平塚1号墳の円筒埴輪は小型であるが、口径と底径との差があまり大きくない円筒形を呈する。全体を5段につくる円筒埴輪は4巻上げ単位によって成形され、内外の調整法はウワナベ古墳の円筒埴輪と同じである。しかし、胎土には粗い砂をふくみ、刷毛目の密度が粗く、ウワナベ古墳の埴輪に比して粗雑なつくりである点はまぬがれない。大きさや胎土などに相違点があるとはいえ、この2古墳の埴輪がほぼ同じ時期に共存する可能性はつよい。

平塚2号墳の円筒埴輪については全形をしりうるものがなく、巻上げ単位をたどることはできなかったが、1号墳の円筒埴輪とほぼ同じつくりである。ただ、2号墳の場合では内面調整の主流が指撫であり、刷毛目が口縁部付近に限定されていること、口径が底径よりも大きいなどの点において相違する。このようなことからすれば、平塚1号墳よりも平塚2号墳の埴輪のほうが少しく新しい傾向を示しているといえよう。

黒斑

埴輪の検討に際して、焼成時に黒斑を生じているか否かが重大な問題となる。すなわち、黒斑を生じる比較的軟質の埴輪は、土師器などと同じく窖窯を用いずに焼成したものであり、黒斑を欠く比較的硬質の埴輪は、窖窯によって焼成した可能性が強いからである。^{*} この相違は、埴輪生産における一つの大きな画期としてとらえることもできる。さて、平塚1号墳では、すべての埴輪に黒斑現象がみられる。しかしながらウワナベ古墳と平塚2号墳の埴輪には、黒斑は皆無であり、淡黄色ないしは灰黄色をおびた硬質のものをふくんでいる。さらに、それらのなかには、従来から「須恵質埴輪」とよばれてきた赤紫色を呈する硬質の埴輪をふくんでいる。この種の埴輪はウワナベ古墳の造出し付近で採集した一群の須恵器片ときわめて類似しており、両者があたかも同じ窖窯で焼成したかの感をうける。黒斑のない埴輪は、須恵器窯の導入および普及という段階の所産とするのが至当であろう。このようなみかたからするならば、時期を接して存在する3古墳の前後関係は、平塚1号墳、ウワナベ古墳、平塚2号墳という順序になる。そうして、ウワナベ古墳の年代は、須恵器窯の開始とされる5世紀中葉を遡らないことになる。しかしながら、上述のように平塚1号墳とウワナベ古墳とがほぼ同時期に築成された可能

^{*} 川西宏幸「埴輪研究の課題」(史林 第56巻4号 1973, p. 108)

性もつよい。というのは、さきにのべたように、成形・調整の面でより古い手法を一部にとどめるウワナベ古墳の埴輪が、新しい焼成技法を採用し、古い成形・調整手法をとどめていない平塚1号墳の埴輪が古い焼成技法にもとづいているからである。それは1種の過渡期現象とみることができるとともに、新技術の採用みられる時期差は造墓者のもつ権力の優劣に起因するのであろう。

ウワナベ古墳の埴輪が優秀で大型品であることや製作数量がきわめて多数にのぼることから **製作体制** すると、平塚1号墳の場合とはことなる隔絶した埴輪製作体制を維持していたとみるべきであろう。その体制内には、成形・調整手法にみられる保守的な伝統性を温存する。と同時に、革新的な新しい焼成の技術が初期須恵器の場合と同じように独占的に保有されたのである。平塚1号墳の埴輪製作の体制はあらゆる面でウワナベ古墳のそれよりも劣っていたとみななければならぬ。そのことから、成形・調整手法の面で新しい手法を導入しえても、焼成段階での新技術を楽しむ体制になかったのである。

近接して築造するウワナベ古墳と平塚1号墳の間における埴輪製作には緊密な技術交流は存在しない。だが、平塚2号墳とウワナベ古墳の間には若干の類似関係がみつめられる。それは2号墳において、新しい焼成法を採用していることや、蓋形埴輪の類似という点である。すなわち、蓋の笠部に凸帯をつくらず、縁部を直立させ、篋描き沈線または押圧痕でヒダをあらわす形態が、平塚1号墳になく、ウワナベ古墳に存在するからである。つまり平塚1・2号墳の埴輪が同一系統上の埴輪製作体制内でつくられたとすれば、2号墳の段階になってウワナベ古墳の埴輪製作体制との交流がおこなわれたことになる。

古墳群 佐紀盾列古墳群中におけるウワナベ古墳については、主として古墳の平面規格の側面から多くの研究者が言及している。しかし、今回の調査では積極的に古墳群の問題を論じる資料がないので、ここではそれにふれないことにする。

平塚1・2号墳の前駆的な古墳としては不退寺裏山古墳があり、この古墳との位置関係からすると、3基の古墳が同一系譜につながる可能性はつよい。他方、墳形の状況からすれば、ウワナベ古墳はコナベ古墳におくれて築成されたとする通説は妥当なところであろう。つまり、佐紀盾列古墳群の西端に不退寺裏山古墳群とでもいうべき1群の古墳群が接している状況を呈している。平塚1号墳はウワナベ古墳に先行する可能性もあろうが、平塚2号墳は明かにウワナベ古墳の築成後につくられている。さらにウワナベ古墳と平塚2号墳の間には埴輪製作の面で類似性があり、両古墳が主従関係にあることを示している。要するに平塚2号墳の段階になって不退寺裏山古墳群は佐紀盾列古墳群にくみこまれ陪冢になったのではあるまいか。ウワナベ古墳の北方の陪冢群については発掘された例があり、* 埴輪からすれば、陪冢群には2種類がある。大和5号墳のように主墳とまったく同じ埴輪を樹立する場合と、大和3号墳のように小型で粗雑な埴輪を樹立する場合とである。これは、ウワナベ古墳の陪冢群に、主墳と同じ技術集団によって築成されたものと、墓域のみの割譲をうけそれ以外の面では独自に築成したものの2系列が存在したことを示している。平塚2号墳が後者の系列にはいることはいうまでもない。そして、この前方後円墳の築成が、佐紀盾列古墳群の終焉でもあった。

* 奈良県『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報 第4輯』1949